

「問答無用で」

個人的な話で恐縮ですが、私は、基本的に初対面の人と話す時には、全く緊張しません。多分、相手がどんなに偉い人でも緊張しないと思います。その理由は簡単で、初対面の方は私のことを何も知らないからです。私がどんな性格の持ち主で、どんな実績があつて、どんな失敗をして、どんな苦い記憶を引きずっていて、と言うことを全然知らない人に対して、私はなんら臆するところも、恥じらうこともなく、「こんにちは」と平気で挨拶ができます。その一方で、私のことをよく知っている人ほど、私は緊張して言葉が出にくくなることがあります。もちろん、仲の良い、よく知っている人なら臆することも、恥じらうこともありませんが、まあ、ほら、ちょっと微妙な関係の人っているじゃないですか、誰にでも。私は、私の失敗や苦い思い出を知っている人の前に立つと、なんかダメなんですよね。負い目がある、ということなんでしょうね、きっと。

そんな私にとって、今日の聖書のお話に出て来るパウロさんの言葉は、とても共感できます。パウロさんも、滅茶苦茶負い目のある人だったんですね。詳しい話は省略しますが、パウロさん、かつては大のキリスト教嫌いとして、その能力を遺憾なく発揮し、キリスト者たちを摘発、連行していました。今回の聖書箇所に出て来るステファノさんという人は、パウロさんが関わった殺害、処刑の中で、最も人々の記憶に残る人物でした。パウロさん自身も、キリスト教を弾圧し続けた経験の中で、ステファノさんを特に憶えていたという点は、なかなか興味深いことです。つまり、パウロさんは、キリスト教の宣教、伝道において、おそらく最も損なってならない、失われてはないステファノさんという人を見殺しにして、かつ、それを喜んだ、という自覚

があるということです。それは、間違いなく「罪の自覚」というものです。

人が最も弱くなる時と言うのは、自分に非があると認めた時だと言われています。だから、人はあまり自分の非を認めるということが得意ではないのかも知れません。誰だって、弱い自分であることは嫌なものですから。自分の弱さを遠ざけるために、自分の非や罪を認めることを避けてしまう。そういう心の側面って、人間誰しも持っているんじゃないかと思います。なので、その点を突いて、責め立てても、あまり意味は無いと私は考えています。人間みんなそういう風に創られているなら、つまり、弱い自分じゃなくて強い自分であるために、自らの非や罪を認められない、という風に神様によって設計されているなら。神様の設計に文句を言っても仕方ありません。そういうある種の自己防衛反応を、人は構造的に持っているんだと受け入れた上で、他者の弁明や、言い訳や、逃げ口上や、あるいは、そもそも自分の非や罪を生じさせるような状況に近づかない奥床しさや、謙遜や卑下について理解する必要があるでしょう。例えば、とても卑近な事例ですが、研修会や講習会の場で、「なにか質問はありませんか？」と促されて、謙虚な思いでシーンと黙っている、その心の裏側にあるのは、実は自らの非や罪を避けたいという根源的な欲求なのだ、なんて言うと言い過ぎでしょうか。

でも、そういう神様によって設計された弱さを遠ざけたい心を持ちつつ、でも時には「行け」って言われることがある、と言うのが今日の聖書箇所のお話なのだと思います。パウロさんは、自分の非や罪を隠し通すことができない、自分の乱暴狼藉を知っている人々のもとに行くことを断固拒否しました。多分、そこに行ってしまうと、パウロさんは、強い自分ではいられないと感じ取ったのでしょう。力強く、雄弁に語ることなど不可能だと悟ったのだと思います。パウロさんは、自分の非や罪が知られていない、自分の非や罪が明らかにされないところで、快適に調子良く宣教したかったのかも知れない。でも、イエス様は行きたくないところへ「行け」と言う。「わ

たしが遣わすのだ」と言って、問答無用で送り出そうとする。それは、「自分の弱さを遠ざけたい」という仕組みを持つ人間存在にとって、とても残酷なことであると言えます。

でも、人間生きていれば、そういう残酷な状況に置かれることはあります。自分のダメなところなんて、自分が一番よく知っているのに、それを他人に追及されたり、責められたり。「そんなの言われなくたって分かってるよ」と愚痴りつつ、案の定、失敗を重ねて、さらに苦言を呈されるという。そういう残酷な状況において、でも、忘れていたくないのは、誰が、その場に送り出したか、ということです。誰の命で、誰の采配で、自分は、その残酷な状況にあるのか。もちろん、この世的な視点から見れば、それは、自分の上司の命であったり、選挙の結果であったり、誰かによる推挙だったりするわけですが、さらに高みにいます方のことに思い及ばせて考えてみたいと思います。神様が、イエス様が「行け」と言っている。だから、ここにいる。ここにいらされている。そう想像力を逞しくしたところで、別に今のしんどさや苦しみが軽くなるわけじゃないでしょう。行きたくないなら、行かないって選択肢はいつでも用意されています。でも、そういう「行けと言われている信仰」を持つことで得られる新たな視点もあろうかと。それは、神様に対する良い感じの責任転嫁です。問答無用でイエス様が行けって言ったんでしょ、神様がここに来てって言ったんでしょ。だったら、なんかの勝ち筋とか、逃げ道とか、ハッピーエンドとか、なんかあるはずでしょ、と。全知全能の神様が、こんなしょうもない私を、嫌がる私を、それでも尚、用いられると言うのだから、そこには絶対、見通しと見込みがあるはずでしょ、と。弱く、弱いから非を認められず、罪を受け入れられず、でも、そんな私を見つけて、声を掛けて、自分には想像もできない成り行きを準備されている方がいる。そんな信仰に支えられて、時に理不尽であり、時に非情であり、でも、確かに神様の生きる世界を私は歩んでいきたいと思えます。

弱さも、非も、罪も。全部、創り主である神様に委ね、隣人であるイエス様に拠り頼みながら、私たちがここに生きている必然、御心によって生かされている、この現実を前向きに受け入れて。まあ、嫌なことも、面倒なことも起こるけど、最後は何とかなるさという信仰を持って歩んで参りましょう。最後にお祈りを致します。

神様。今日も、何の功もない私たちを、ここに招き、祝福してくださり、心から感謝致します。私たちは、あなたの似姿として、あなたの愛を受け、あなたの御守りの内に生きる者であることを知りつつ、自分の弱さに気付き、罪や非を負うことを避けたいがために、自らのことを過少に評価することがあります。あなたが、そのように私たちのことを造られたのだと思います。であるならば、それでも尚、私たちが、喜んであなたの御心に従い、御旨のままに生きることができるよう、必要な助けと導きを十分に示してください。今日から始まる1週間も、弱さを抱きつつ歩む私たちのことを、どうか力強く導き、あなたと共にあることの幸いを感じることが出来ますように。このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前を通して、あなたの御前にお捧げ致します。